



南紀熊野の民話

クジラとモグラ おいの伝説

作 南紀熊野ジオパーク推進協議会

絵 大江 みどり

南紀熊野の民話
クジラとモグラ おいの伝説

初版発行 2023年3月
制 作 南紀熊野ジオパーク推進協議会
〒649-3502
和歌山県東牟婁郡串本町潮岬2838-3

絵 大江 みどり

編集・印刷 中和印刷紙器株式会社

無断複製・転載を禁じます。

この絵本に描かれている風景の一部には、
フロッタージュという技法を用いて、
岩や草木の模様を
紙に鉛筆でこすり写しています。
本物からうつしとったからこそ伝わる
大地や自然の素晴らしさを
感じてもらえると嬉しいです。

大江 みどり

クジラとモグラ

むかし、ある人里離れた海辺の寺に、ひとりのお坊さまが修行をしやってん。
ある日のこと、お坊さまが観音様の前で念仏を唱えやると、
「熊野へ行き、那智の滝で荒行をすることで悟りを開きなさい。
しかし、那智の滝に向かう途中には人間を食う鬼がいるので気をつけなさい」
という声が聞こえてきたんやと。



よくあさ ぼう ふね の こ うみ で
翌朝、お坊さまは舟に乗り込み、海へ出たんやと。

とちゅう こ お み
その途中、子どものクジラがシャチに追われやるのを見つけたんで

たす おん けっ わす
助けたったんやの。クジラは「このご恩は決して忘れせんわ」と

なん ど あたま さ うみ なか かえ
何度も頭を下げて海の中へ帰っていったんやと。

ぼう なち たき ちか かいがん つ
それからしばらくしてお坊さまは那智の滝に近い海岸に着いたんやと。

たき ある
滝のほうへ歩きやると、

こ たす
子どもらにいじめられやるモグラがおったんで助けたったんやの。

おん けっ わす
するとモグラも「このご恩は決して忘れせんようにするわん」と

なん ど あたま さ
何度も頭を下げて、

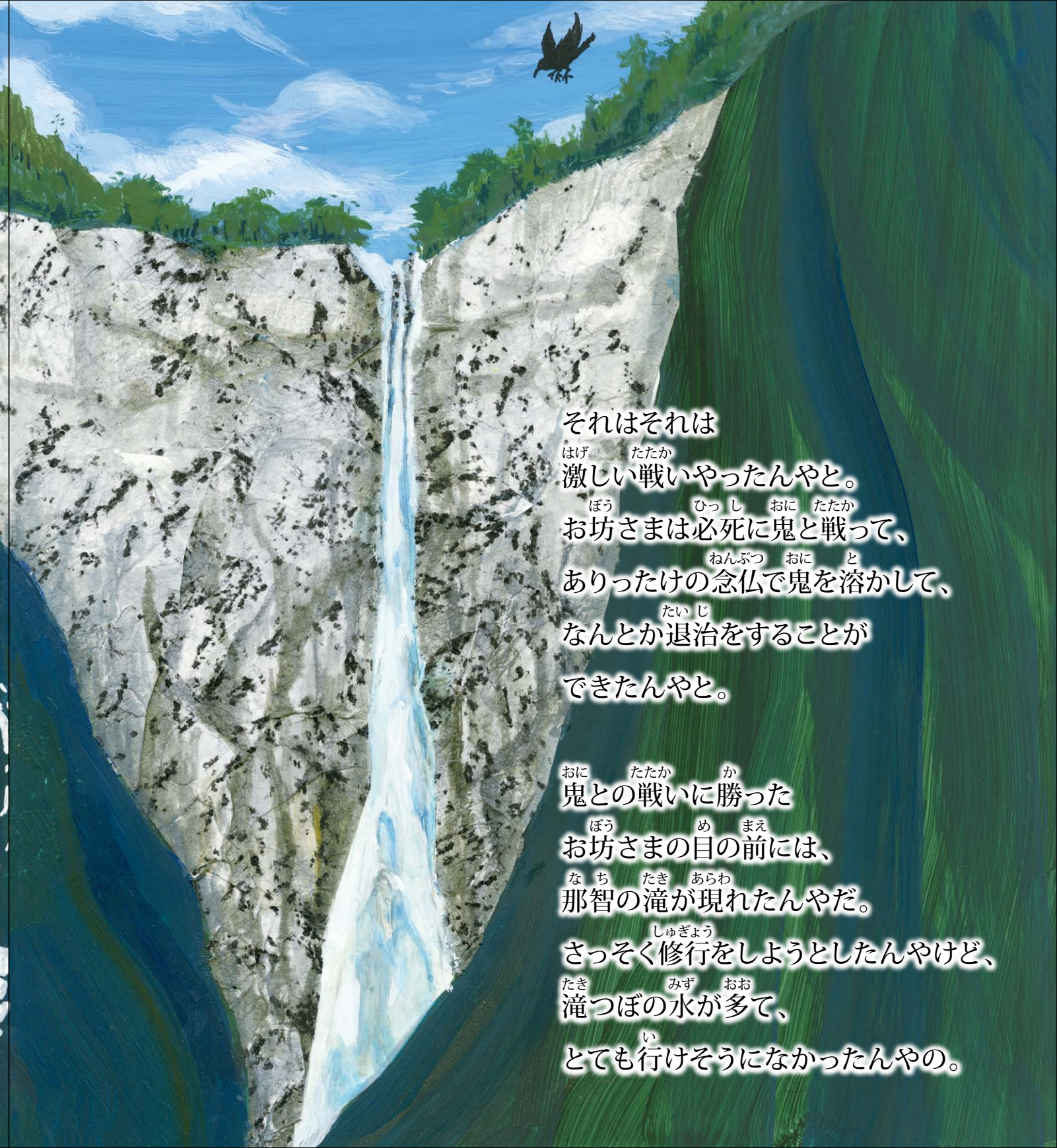
つち なか かえ
土の中に帰っていったんやと。

ぼう なち たき む やまおく はい い
お坊さまが那智の滝に向けてどんどん山奥へ入って行くと、

たき おと き
かすかに滝の音が聞こえてきたんやだの。




もうじき滝に着くと思った時、
お坊さまの目の前に
恐ろしい顔をした鬼が
姿を現したんやだ。



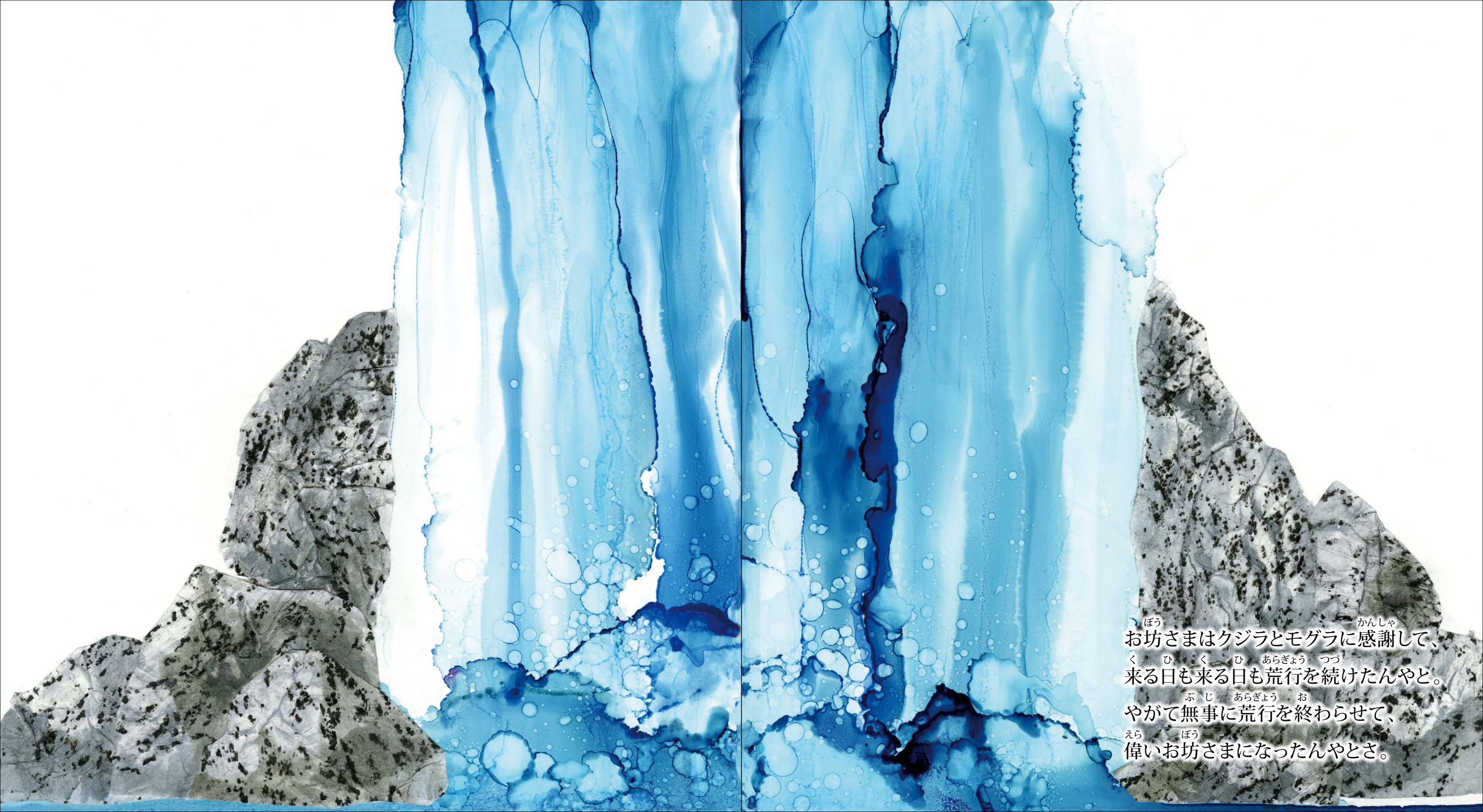
それはそれは
激しい戦いやったんやと。
お坊さまは必死に鬼と戦って、
ありったけの念仏で鬼を溶かして、
なんとか退治をすることが
できたんやと。

鬼との戦いに勝った
お坊さまの目の前には、
那智の滝が現れたんやだ。
さっそく修行をしようとしたんやけど、
滝つぼの水が多て、
とても行けそうになかったんやの。



^{ぼう}お坊さまが^{こま}困りやると、
^{たす}助けたモグラが
^{なかま}仲間らを^つ連れて^きやって来たんやと。
^{おんがえ}モグラたちは恩返しとばかりに
^{たき}滝^{そこ}つぼの^{うみ}底から海まで
^{なが}長いトンネルを^ほ掘り^{はじ}始めたんやと。

ほいで、これを^し知ったクジラは
^{なかま}仲間たちとそのトンネルから^{なが}流れ^で出てくる^{みず}水を
^す吸い^こ込んで^{うみ}海の上には^{うえ}きま^くくっての。
そのおかげで、^{たき}滝^{みず}つぼの水は^へたちまち減^へって、
^{しゅぎよう}修行ができるくらいになったんやと。



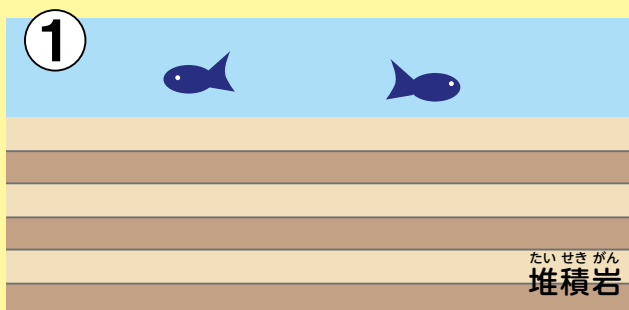
ぼう かんしゃ
お坊さまはクジラとモグラに感謝して、
く ひ く ひ あらぎょう つづ
来る日も来る日も荒行を続けたんやと。
ぶ じ あらぎょう お
やがて無事に荒行を終わらせて、
えら ぼう
偉いお坊さまになったんやとさ。

お話^{はなし}でてきた場所^{ばしょ}はどんなところ？

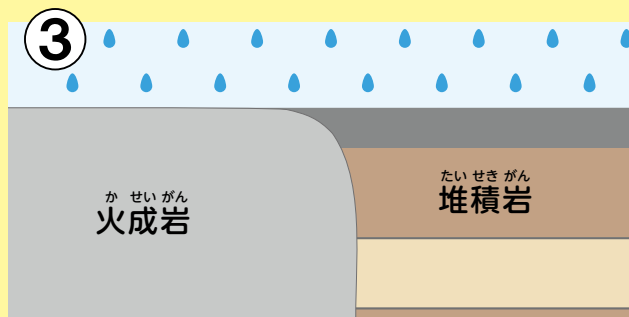
那智大滝^{なちのおおたき}

那智山にある落差133mの滝で、一段の滝としては日本最大です。那智大滝は性質の異なる2つの大地の境目付近にできています。そこを流れる那智川の影響で那智大滝ができました。その雄大さから古くから信仰の場であり、ユネスコ世界文化遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の構成資産となっています。

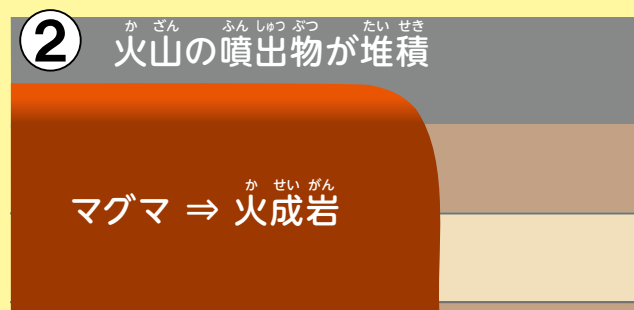
那智大滝^{なちのおおたき}の^{かた}でき方



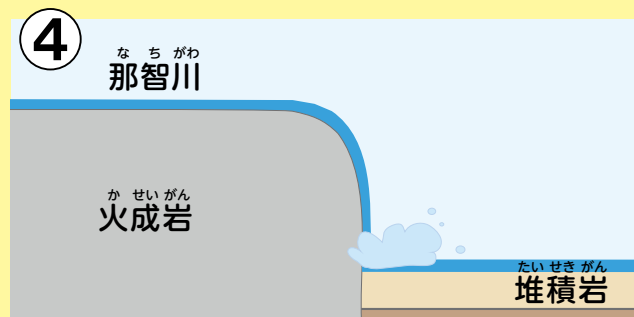
海の中で砂や泥が堆積して地層ができ、やがて陸地となる（堆積岩）。



長い時間をかけて地表が浸食され火成岩が現れる。



地下から来たマグマが堆積岩に入り込み、冷えて固まる（火成岩）。



火成岩に比べるとやわらかい堆積岩が早く浸食され滝ができる。



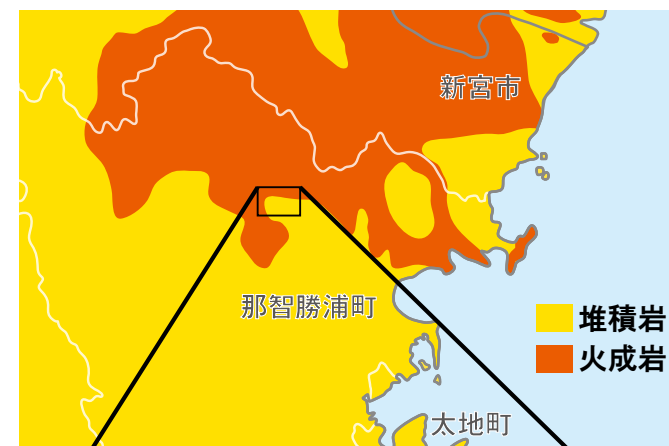
ユネスコの「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」に登録されています。

那智の田楽



毎年7月14日に行われ、国の重要無形民俗文化財に指定されています。

那智の扇祭り



おいの伝説

むかしむかし、いの^{さわ}沢いうところに
・ ・ ・ ^よおいのと呼ぶそれは美しい娘^{うつく むすめ}がおったんやと。

おいのはお母^{かあ}さんの手伝^{てつだ}いをしいもて、
毎日、山^{まいにち やましごと}仕事をしやるお父^{とう}さんのもとへ、
お昼^{ひる}の弁当^{べんとう}を届け^{とど}やったんやだ。

ある日^ひのこと、
お父^{とう}さんは浮島^{うきしま}の森^{もり}へ薪^{まき}を採^とりに行^いったんやと。

おいのは久^{ひさ}しぶりにお父^{とう}さんといっしょに
お昼^{ひる}を食^たべようと、二人^{ふたり}分の弁当^{ぶん}を持^{べんとう も}って、
森^{もり}へやってきたんやと。

ほいで、お父^{とう}さんを見^みつけると
「お弁当^{べんとう も}持^たってきたんで、食^たべよれ」と声^{こえ}をかけ、
おお ^{いし}大きな石^{すわ}に座^{じゅんび}って準備^{はじ}を始めたんやだ。



ところが、^{はし}箸を^{わす}れたあることに^き気づいたんやだの。

そこで、おいのは

「^{とう}お父さん、^{はし}お箸を^{さが}探してくるわ」と言うて、

^{はし}箸の代わりになる^{えだ}カシャバの枝を

^{さが}探しに行くことにしたんやだね。

^{とう}お父さんは

「^{とお}遠くい、^い行ったらあかんで。^{もど}はよ戻ってこいよ」と

^{こえ}声をかけたんやけど、

おいのは^{もり}どンドン^{おく}森の奥へ^{はい}入ってしもたんやだの。



とう
お父さんはしばらく待ちやったんやけど、
おいのはなかなか帰^{かえ}って来^こんのやだ。
そこで、心配^{しんぱい}になって、探し^{さが}に行く^いことにしたんやの。
すると、

「たすけて～、お父^{とう}さ～ん」

という大^{おお}きな叫^{さけ}び声^{こゑ}が聞^きこえてきたんやと。
あわててその声^{こゑ}のしたほうへ行^いくと、
なんと大^{だい}蛇^{じゃ}がおいのを
の
飲^のみこもうとしやるとこやったんやだの。



とう み おどろ
お父さんはそれを見て驚き、
たす おも
なんとか助けたろ思たんやけど、
どうすることもできなんだんやだの。
ひっ し ていこう
おいのも必死になって抵抗したんやけど、
だいじゃ もり なか
やがて大蛇はおいのとともに森の中にある
そこ ぬま き
底なしの沼へ消えてしもたんやと。
とう ぬま む
お父さんはやるせなくなり、沼に向かって
むすめ すがた み
「たのむさか、娘の姿をもういっぺん見せてくれ」
さけ
と叫んだんやの。
かぜ ふ
すると、さあっと風が吹いて、
くち だいじゃ すがた あら
おいのを口にくわえた大蛇が姿を現わしたんやけど、
すがた け
やがて姿を消してしもたんやだの。



とう
お父さんは、それから何度も何度も頼んだんやけど、
だいじゃ ふた た う あ
大蛇が再び浮かび上がってくることはなかったんやの。

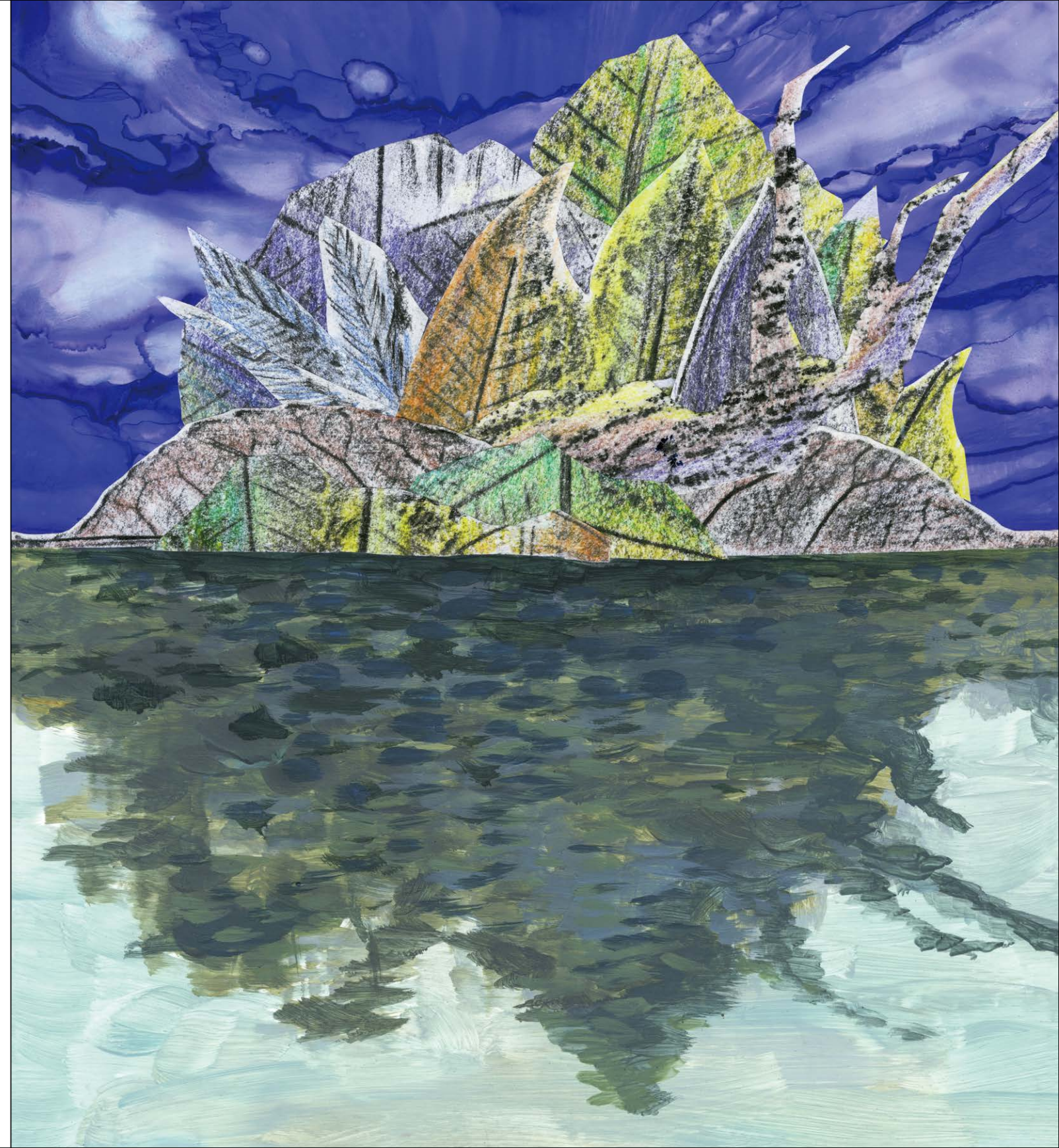
「おいのさんが、あんまり美しいさか、
だいじゃ
大蛇にみいられたんやろ」

むらびと
と村人らはうわさしておたんやだの。

それから

「おいの見たけりゃ いのどへござれ
おいのいのどの蛇のがまへ」

と、うたわれるようになったとさ。



はなしで お話に出てきた場所は どんなところ？

うきしま もり 浮島の森

しんぐう し うきしま
新宮市浮島3-38

うきしま もり なんぼくやく とうざいやく もり めま うえ う
浮島の森は南北約60m、東西約80mの森が沼の上に浮か
しま ど だい でいたん でいたん めま うえ
んでいる島で、土台は泥炭でできています。泥炭は沼の上に
つ しよく ぶつ うきしま もり しゅうへん
積もった植物がもととなってできたもので、浮島の森周辺
つめ わ みず しよく ぶつ じゅうぶん ぶん かい
では冷たい湧き水があったため、植物が十分に分解されず
でいたん かんが しま ど だい
に泥炭になったと考えられています。島の土台となっている
でいたん とく かる みず う うきしま もり
泥炭は特に軽いので水に浮かんでいます。また浮島の森で
やく しゅ あま しよく ぶつ うきしま もり
は約130種余りの植物をみることができます。浮島の森は
しんぐう いの そ うきしま しよく ぐん らく ねんくに てんねん き ねんぶつ
「新宮藺沢浮島植物群落」として1927年国の天然記念物に
してい しゅう わ ねんだいごろ かぜ ぶ しま うご
指定されています。昭和20年代頃までは風が吹くと島が動
き ろく げんざい うご
いたと記録されているそうですが、現在では動きません。

うきしま もり
浮島の森イメージ



写真提供：新宮市観光協会



ゆう ほ どう せい び
◎遊歩道が整備されています



民話とは、昔の人が口から口へと語り継いできたものです。語り継がれてきたものなので、いろいろな話が存在しています。本書に収録した民話は、そのうちのひとつで、新宮弁で書いています。

クジラとモグラ

むかし、ある人里離れた海辺の寺で、ひとりのお坊さまが修行をしていました。ある日のこと、お坊さまが観音様の前で念仏を唱えていると、「熊野へ行き、那智の滝で荒行をすることで悟りを開きなさい。しかし、那智の滝に向かう途中には人間を食う鬼がいるので気をつけなさい」という声が聞こえてきました。

翌朝、お坊さまは舟に乗り込み、海へ出ました。その途中、子どものクジラがシャチに追われているのを見つけたので助けてあげました。クジラは「このご恩は決して忘れません」と何度も頭を下げて海の中へ帰っていきました。それからしばらくしてお坊さまは那智の滝に近い海岸に着きました。滝に向けて歩いていると、子どもたちにいじめられているモグラがいたので助けてあげました。するとモグラも「このご恩は決して忘れません」と何度も頭を下げて、土の中に帰っていきました。お坊さまが那智の滝に向けてどんどん山奥へ入って行くと、かすかに滝の音が聞こえてきました。もうすぐ滝に着くと思った時、お坊さまの目の前に恐ろしい顔をした鬼が姿を現しました。それはそれは激しい戦いでした。お坊さまは必死に鬼と戦い、ありったけの念仏で鬼を溶かし、なんとか退治をすることができました。

鬼との戦いに勝ったお坊さまの目の前には、那智の滝が現れました。さっそく修行をしようとしたものの、滝つぼの水が多くて、とても行けそうにありません。お坊さまが困っていると、助けたモグラが仲間たちを連れてやって来ました。そして、モグラたちは恩返しとばかりに滝つぼの底から海まで長いトンネルを掘り始めました。また、これを知ったクジラは仲間たちとそのトンネルから流れ出てくる水を吸い込んで海の上にはきました。そのおかげで、滝つぼの水はたちまち減り、修行ができるくらいになりました。

お坊さまはクジラとモグラに感謝し、来る日も来る日も荒行を続けました。やがて無事に荒行を終わらせ、偉いお坊さまになりましたとさ。

おいの伝説

むかしむかし、いの沢というところにおいのと呼ぶそれは美しい娘がいました。おいのはお母さんの手伝いをしながら、毎日、山仕事をしているお父さんのもとへ、お昼の弁当を届けていました。

ある日のこと、お父さんは浮島の森へ薪を採りに行きました。おいのは久しぶりにお父さんといっしょにお昼を食べようと、二人分の弁当を持って、森へやってきました。そして、お父さんを見つけると「お弁当を持ってきたので、食べましょう」と声をかけ、大きな石に座って準備を始めました。ところが、箸を忘れていることに気がつきました。そこで、おいのは「お父さん、お箸を探してくるね」と言い、箸の代わりになるカシャバの枝を探しに行くことにしました。お父さんは「遠くに行っちゃだめだよ。はやく戻っておいで」と声をかけましたが、おいのはどんどん森の奥へ入っていきました。

お父さんはしばらく待っていましたが、おいのはなかなか帰ってきません。そこで、心配になり、探しに行くことにしました。すると、「たすけて～、お父さ～ん」という大きな叫び声が聞こえてきました。あわててその声のしたほうに行くと、なんと大蛇がおいのを飲みこもうとしているところでした。お父さんはそれを見て驚き、なんとか助けようとしたのですが、どうすることもできません。おいのも必死になって抵抗しましたが、やがて大蛇はおいのとともに森の中にある底なしの沼へ消えてしまいました。

お父さんはやるせなくなり、沼に向かって「お願いだ、娘の姿をもう一度見せてくれ」と叫びました。すると、さあっと風が吹き、おいのを口にくわえた大蛇が姿を現わしましたが、やがて姿を消していきました。お父さんは、それから何度も何度も頼みましたが、大蛇が再び浮かび上がってくることはありませんでした。

「おいのさんが、あまりに美しいから、大蛇にみいられたんやろ」と村人らはうわさし合ったそうです。それからは「おいの見たけりゃ いのどへござれ おいのいのどの蛇のがまへ」と、うたわれるようになりましたとさ。



南紀熊野ジオパーク
NANKI KUMANO GEOPARK